

「イスラエル建国史」

34 英委任統治下のパレスチナ 11

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

アメリカ・シオニスト緊急委員会の発足

1939年8月24日、16日からジュネーブで開催中の第21回コンGRESに、独ソ不可侵条約締結のニュースが届いた。参加者達はそれが戦争を意味すると判断した。戦争はホロコーストを加速し、ヨーロッパのユダヤ人社会は重大な危機に直面する。会場は重苦しい空気に包まれ、コンGRESは予定を1週間切りあげて閉幕、ワイツマン会長が悲壮な別れの挨拶をした。

シオニスト執行部(ユダヤ機関)は、ロンドンとエルサレムにおかれていたが、戦争で機能しなくなった場合に備え、8月末ワイツマンら首脳はアメリカのシオニスト達に、特別委員会の設置を求めた。委員会は、アメリカ・シオニスト機構(ZOA)



写真中央 ワイツマンとベングリオン

のソロモン・ゴールドマン(1893～1953)、募金団体の統一ユダヤアピール(UJA)と統一パレスチナアピール(UPA)の二つをたばねる共同議長アバ・ヒレル・シルバー(1893～1963)とルイス・リップスキー(1876～1963)、そしてステファン・ワイズを中心につくられ、1942年1月にアメリカ・シオニスト緊急委員会(AZEC)と改称し、強力なロビー団体に成長した。戦後、政治力学の重心がイギリスからアメリカと国連へ移ったことを考えれば、アメリカのシオニスト諸派がまとまったのは重要な成果であった。

ユダヤ人国家建設を明確にしたビルトモアプログラム

1942年5月6日、緊急委員会の呼

びかけによって、全米シオニスト特別会議がニューヨークで開催された。アメリカ・シオニスト機構やハダサ婦人シオニスト機構など、アメリカのシオニスト諸派の代表、そして世界シオニスト機構からワイツマン会長、ベングリオン執行部議長が参加、600名が一堂に会して、戦中戦後の方針を話し合った。会議を主導したのがベングリオンで、パレスチナにおけるユダヤ民族の主権確立を強調し、熱弁をふるった。

会議は8項目の決議を採択し、6日間の日程を終えた。その決議は、開催場所ビルトモアホテルの名を冠して、ビルトモアプログラムと称され、三つの柱で構成されている。即ち、今次大戦を、自由と民主主義を守る国際正義の戦いと位置づけ、連合国に対する全面的協力を表明すると同時に、1939年の白書を拒否し、ユダヤ人国家の建設を主張。「勝利に続く、平和と正義そして平等に立脚する新しい世界秩序の構築は、ユダヤ人の永住地喪失問題が解決されない限り、絵空事に終る」と結んだ。

決議はシオニスト執行部が支持し、戦後の1946年12月に開催された第22回コンGRESも、この方針を確認した。ベングリオンにとって主権国家建設は目新しい内容ではない。しかし、全体の総意が、従来のナショナルホームからユダヤ人国家(Jewish Commonwealth)の建

【これまでの流れ】

ユダヤ人のパレスチナの地への移民は、イスラエル建国のはるか以前から綿々と続いてきた営みであった。しかし、その流れを急速に加速させたのが、ナチスドイツの勃興である。ナチスがヨーロッパを席卷し、征服した先々でユダヤ人を強制収容所に送り、虐殺していく中で、ヨーロッパを脱出しようとする大量のユダヤ人難民が発生した。一方、多くの国がユダヤ人難民の受け入れを拒否していたため、ユダヤ人のヨーロッパ脱出は困難を極めた。その中で、パレスチナのユダヤ人社会を中心とするユダヤ人組織はユダヤ難民救済のために奔走する。

設になったのである。これは基本方針として堅持される。多民族国家案を支持するハショメル・ハツアイル(後のマパム党系)は支持しなかった。アメリカの非シオニスト団体では、シオニズム運動と距離をおくアメリカ・ユダヤ人委員会が反対した。しかしいずれも、ホロコーストの惨状、生残りのパレスチナ移住制限を目の当たりにして、考えを改めるのである。

戦時中の対英協力和ユダヤ旅団の編成

ベングリオンは、戦争勃発後シオニスト執行部議長として声明をだし、「我々は、白書(1939年のマクドナルド白書)がないかの如くイギリスと共にドイツと戦い、戦争がないかの如く白書と戦う」と発表した。それは、パレスチナのユダヤ人社会に共通する思いであった。

第二次世界大戦中、その社会から青年男女3万人が英軍に志願し、さまざまな任務についた。そのうち700人が戦死、数千人が負傷した。捕虜になった者1,769人。名誉の勲章を授与された者323人である。パレスチナのアラ



ユダヤ旅団を視察中のエルンスト・ベンジャミン



ブ社会代表を以て任じる大法官フセイニ、或いはエジプトなど親独色の強かったアラブ社会とは対照的である。

その年の10月に、まずパレスチナ駐留英軍に1,000名が志願し、整備、輸送などの所謂補助部隊で働いた。1940年夏、戦争が北アフリカと中東へせまってきた。この時は、ユダヤ機関の協力で、2,000名が英空軍(RAF)に志願した。防空隊や通信隊への配属が多かったが、ワイツマンの甥でテルアヴィヴ生まれのエゼル・ワイツマン(1924～2005、第7代大統領)のように、英空軍パイロットになり、インド方面に派遣された者もある。

1942年7月、ロンメル元帥の指揮するナチドイツのアフリカ方面軍(通称アフリカ軍団)がエルアラメインに到達し、アレキサンドリアに迫る勢いになった。ここが陥落すればスエズ運河が危なくなる。カイロはパニック状態になった。同年8月6日、英軍は戦力増強の一環としてパレスチナ連隊の編成を発表した。現地のユダヤ人青年は志願したが、ユダヤ機関は志願兵の募集に協力しなかった。連隊は、ユダヤ人大隊3、アラブ人大隊1の構成であった。ユダヤ人部隊がナチドイツ打倒に貢献する。これが同機関の願いであった。



エゼル・ワイツマン



ロンメル元帥

ユダヤ機関は英政府に師団級のユダヤ人部隊の編成を強く要請した。

しかしイギリスの政府と軍首脳は、独自色を持つ部隊の編成に強く反対した。英断したのは、ウィンストン・チャーチル首相である。規模は師団ではなく旅団で、1944年9月20日正式に発表され、同年10月編成が完了した。カナダ出身のユダヤ系軍人エルンスト・ベンジャミン准将が旅団長に任命され、シオニスト旗を隊旗とした。パレスチナ連隊のユダヤ人大隊3個大隊を中核に、在英ユダヤ人400名を含め兵力5,000。ほかに英人ユダヤ人混成の砲兵連隊や輸送隊がつき、ユダヤ旅団グループと称される。11月初旬旅団はアレキサンドリア近郊の基地を出発、イタリアへ向かった。そして、投入されたイタリア東部正面の向うには、ドイツの第42狙撃師団(その後第4空挺師団と交替)が布陣し、旅団は50日に及ぶ持久線を展開するのである。

その願いは、その年の11月になって益々強くなった。ユダヤ人虐殺の情報がパレスチナのユダヤ人社会に届いたのである。この時ユダヤ人社会は、ナチドイツ打倒と同胞救出の願望にふるいたち、ユダ



ウィンストン・チャーチル

悲劇のパラシュート隊

情報蒐集と地下抵抗組織との連絡を目的とする、パラシュート隊も編成された。ユダヤ機関と英軍と情報機関が協力した敵中潜入の極めて危険な任務で(但し、一部はアメリカの戦略協力局OSSとの共同ミッションであった)、パレスチナのユダヤ人社会から男女約250名が志願、110名が選抜されてパラシュートの降下訓練をうけた。実際に任務についたのは37名である。ハイファの飛行場から飛び立ち、イタリアやバルカン半島へ向かう。降下後、ユダヤ人パルチザン隊やゲットーと連絡するのである。そして3分の1に

あたる12名が捕まり、殺害された。マパイ党幹部のエンゾ・セレニ(1905～1944)は、イタリアに降下して捕まり、ダッハウ強制収容所へ送られて、そこで処刑された。女性降下隊員ハンナ・セネシ(1921～1944)もイタリアへ降下、ユーゴスラビアからハンガリーへ潜入しようとして国境地帯で捕まった。ブダペストに連行されたハンナは、防諜隊の尋問室で母親と対面させられる。母親は移住せず、出身地に残っていたのである。そしてハンナは母親が拷問される恐怖に直面し、逮捕から6ヶ月後の11月に銃殺された。

パレスチナユダヤ人社会は、大きい犠牲の伴う軍隊経験から貴重な技術と組織法を学んだ。これが、戦後に展開する独立闘争に役立つのである。ユダヤ旅団もホロコースト生残りの救援に活躍する。



ハンナ・セネシ

【次号へつづく】

1937年長崎県生まれ。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。

現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書:『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

